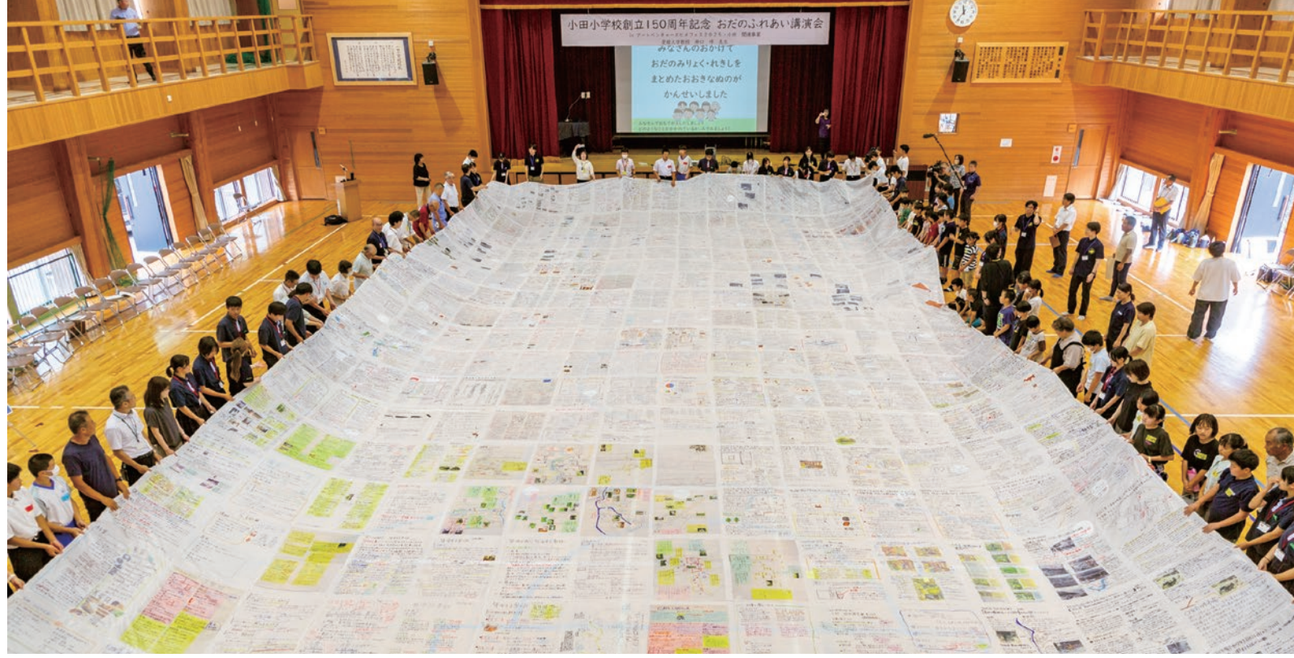
特集

つむぐ

愛媛県と東京藝術大学が主催する「アートベンチャーエヒメフェス2025」（以下、アートベンチャー）が、10月18日～11月3日の間、砥部町・今治市・内子町の3つのエリアで開催されました。

内子町では、小田地域の旧二宮邸（お宿にのみや）をメイン会場として作品などを展示。約13年間にわたり地域の歴史文化を調査してきた、愛媛大学教授の井口梓（あずさ）先生がアーティストとして参加し、旧二宮邸にアート作品「つむぐweaving history」を展示しました。

地域の歴史や文化、人々の言葉の記録を元にした作品には、たくさんの地域への思いが込められています。その作品に触れたり、関わったりした人たちにはどんな思いが広がったのか――。そして過去と未来をつむぐ作品は、私たちに何を伝えたかったのか、催しの様子と併せて紹介します。



肩を寄せて、笑い合って みんなでつむぐアート作品

「つむぐ」の作品はどんな思いで、作り出されたのでしょうか。その背景に迫りました。

地域の歴史と文化のかけらを結ぶ

愛媛大学社会共創学部井口梓研究室では、小田の歴史文化を13年間調査し続けてきました。きっかけは13年前、臼杵地区で30年以上も途絶えていた獅子舞とおねりの復活に協力したことでした。それ以来、森林鉄道や巨樹巨木、芝居小屋など、さまざまなテーマを設定し、地域の人たちから聞いた語りを、大きな模造紙に記録しています。毎年、研究室の学生たちが旧二宮邸に数日間滞在し、書き続けた模造紙の数は600枚を超えました。今回のアート作品ではそのうち294枚を布に転写しました。

その布を縫い合わすアート活動が始まったのは、7月の「小田燈籠まつり」から。2カ月にわたり多くの人の手で布が紡がれていきました。最後の縫い合わせは9月24日、小田小学校創立150周年記念に関連した「おだのふれあい講演会」が舞台となりました。小田小・中学校と小田分校の子どもたち約50人が参加し、横11・2メートル×縦23・1メートルの大きな布が完成。井口先生は、「このまちで生きるありとあらゆる世代の人にも、この地域を心から応援したいと思う地域外の人にも、地域の歴史と文化のかけらを拾って結んでほしい」と語ります。

縫い方も、糸の色も自由。きれいに縫えなくても、継ぎはぎだらけでもいい。「誰かと誰かをつないで地域にしていこう」という思いが詰まった大きな布をみんなで広げると大きな歓声が上がりました。井口先生の作品「つむぐ」が生まれた瞬間です。

（右）小田燈籠まつり当日、大絵燈籠の前で（左）布を縫い合わせる参加者

Interview　小田地域の歴史文化の調査に取り組む学生の皆さんに話を聞きました

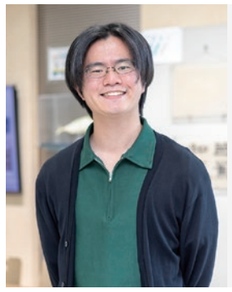
小山　杏子（きょうこ）さん（3回生）

対話は一期一会。二度とないこの瞬間を大事にしたい

調査では主に70～90代の人に話を伺っており、私たちはこの対話する時間を何よりも大事にしています。対話は一期一会で、その時にしか聞けない言葉があり、聞き逃すと同じ話は二度と聞けません。どんな話も地域の歴史をつくってきた重要なことだと思い、一語一句書き漏らさないよう、常にノートを手にペンを走らせています。対話を重ねていくと、新しい発見や忘れていた記憶がよみがえる瞬間があり、地域の皆さんと心を通わせながら探求する過程がとても楽しいです。これからも皆さんと信頼関係を築きながら、小田の文化を調査していきたいです。

「小田が好き、小田を知りたい」という気持ちも膨らんだ

小田地域の聞き取り調査に初めて挑戦しました。大変だったのは調査内容を大きな模造紙にまとめる作業です。写真や地図、イラストも配置しながら文字を手書きするのは想像以上に難しく、深夜まで制作した日もあります。先生や先輩に助けてもらい、なんとか完成。でも限られた時間の中でうまく書けなかったところもあり、悔しさが残りました。それでも地域の人には「残してくれてありがとう」と温かい声をかけてもらいました。来年はその思いに応えられるよう、さらに頑張りたいです。地域の魅力に触れて「小田が好き」「もっと知りたい」という思いも膨らんでいます。



平井　完樹（かんき）さん（2回生）

岸　優花（ゆうか）さん（4回生）

「小田は第二のふるさと」。このまちの文化を残したい

話を伺った人の中には、悲しいですが亡くなった人もいます。文化は住民の生活や知恵、喜びや苦労が積み重なってできたもので、語り継ぐ人がいなければ、いつか忘れ去られてしまいます。でも記録して保存していれば、たとえ人がいなくなったとしても、この土地の文化や人々の思いは社会の中で生き続けます。だからこそ「小田の貴重な歴史を残す」という思いで調査に臨んでいます。この模造紙が、自分たちのまちをより大切に思うきっかけになればうれしいです。小田は私たちを家族のように受け入れてくれた地域で、第二のふるさと。ずっと大事に思っています。

1_イベントのメイン会場となった旧二宮邸　2_住民への聞き取り調査の様子　3_平成26年、大学生が参加した臼杵地区の秋祭り　4,6_調査内容を模造紙にまとめる大学生たち　5_文化交流センタースバルで調査結果を展示　7_田渡地区の歴史をまとめた一枚

小田地域がアートと笑顔に包まれた17日間

アートベンチャーの内子町小田地域の会場には、たくさんの人の笑顔があふれ、すてきな空間が広がっていました。

ワクワクと楽しい気持ち——アートの力が地域に広がる

庭に出て布の上ではしゃぎ回る子ども、座り込んでじっと布を読む人、大学生とにこやかに話しながら縁側に腰かけ作品を眺める人——　アートベンチャーが始まった18日、旧二宮邸は「つむぐ」の作品に触れようと、町内外から訪れた多くの人でにぎわいました。

居間から庭へと流れるように広げられた布で、まちの歴史や人々の記憶がつむがれる様が表現され、訪れた人たちは思い思いに感じ入っていました。

小田中央商店街（以下、商店街）の通りには、古写真や記憶画が60枚ののれんとなって軒下にかかり、来訪者を出迎えています。古写真には昭和初期の秋祭りの様子や、稲木が何段にも連なる農村の風景が写っており、「懐かしい」と当時の暮らしに思いを馳せる人もいました。地域の人たちもいつもとは違う商店街の雰囲気にうれしそう。たくさん人が見に来てくれるから、と、自分の家の周りをきれいに掃除するおばあちゃんの姿もありました。

「つむぐ」や古写真ののれんのほかにも、有志が商店街にある古民家で喫茶を開いたり、大洲和紙で作った道案内板などを設置したりと、訪れる人たちを温かく迎えていました。アートベンチャー小田実行委員長の越智治徳（はるのり）さんは、「アートのチカラで、地域に笑顔が広がった。地域を豊かにする方法はさまざま。これを機に小田の未来について語っていきたい」と話しました。

1_旧二宮邸に展示された「つむぐ」　2_商店街に飾られたのれん　3_布の上ではしゃぐ男の子　4_見学に訪れた小田小学校の子どもたち　5,6_来訪者をきれいな花で出迎えたいと、有志が植えたコスモス　7_オープニングイベントで思いを語る東京藝術大学の日比野克彦（かつひこ）学長　8,10_カフェや行灯など、プロジェクトチームのアイデアが満載　9_日比野学長と井口先生の言葉が入ったボード　11_「巨樹巨木を想う会」によるガイドも　12_地域のお母さんたち手作りの郷土料理を楽しむ来場者　13_旧二宮邸前の蔵では小田地域の映像作品を上映　14_期間中の商店街の様子　15_来場者のため自宅を掃除

「つむぐ」がくれたチカラ

地域の皆さんはアートベンチャーに参加し、「つむぐ」の作品などに触れ、どんな思いが芽生えたのでしょうか。地域の皆さんに話を伺いました。そして、井口先生が作品に込めた地域の未来への願いとは――

「つむぐ」は小田地域の宝 今後も活用してほしい

谷本　功（いさお）さん＝中川西＝

８年前から学生の聞き取り調査に協力し、巨樹巨木や昔の衣食住、子ども時代の遊びなどを語ってきました。とても熱心に聞いてくれるので、何十年前の記憶までよみがえってきます。学生との対話はよいよ楽しいです。

「つむぐ」を見たとき、なんて地域愛にあふれた作品だろうと、感動しました。学生と井口先生、地域の人が向き合ってきた時間を想像せずにはいられませんでした。長年、この地域を、ここで暮らす私たちを大事に思ってくれて「ありがとう」と、感謝の気持ちでいっぱいです。

布に記された写真や文章からは、先人たちの汗がほとばしるような生きざまが伝わってきます。人が減り、地域の将来を思うと心配も多いですが、「まだまだ、やれることはある」と励まされます。「つむぐ」は小田地域みんなの宝物。多くの人に見てもらい、地域のために生かされてほしいです。

この先も楽しい思い出を地域で重ねていきたい

濱田　和栄（かずえ）さん＝小田上＝

小田でアートベンチャーが開催されると聞き、私たちも何かできないかと考えていたところ、バスツアー客の昼食作りをお願いされました。地元の女性たち数人で集まり、せっかくなら郷土料理でおもてなしをしようと、たらいうどんや栗おこわなど、小田の味にこだわったメニューを考案しました。当日はお客さんから「おいしかった」と、うれしい声をたくさんかけてもらい、こちらが元気をもらいました。

小田で生まれ育った私にとって、商店街の軒下に並ぶ古写真ののれんは、とても懐かしかったです。母がだんご汁をよく作ってくれたことや、小田市に大勢の人が集まっていた様子など、子どもの頃を思い出しました。今回、アートベンチャーに参加して楽しかったです。アートや人の笑顔に包まれた商店街を見て、夢があると思いました。この先もみんなで楽しい思い出をつくっていけたらいいですね。

まちの良さを見つけて誰かに発信したい

本田　暖乃（のの）さん（小田中３）

「つむぐ」の制作では、最後の縫い合わせ作業に参加しました。完成した作品をみんなで広げたとき、体育館の一面が布で覆われた光景が心に残っています。一針ずつ時間をかけて手縫いした分、達成感がありました。忘れられない思い出ができました。

旧二宮邸での展示では布を踏み進むと、小田の歴史の上に立っているようでわくわくしました。布に書かれた文字をじっくり読むと、地域のあちこちに芝居小屋があったことや、私の住む寺村地区にたばこ屋さんがあったことなど、初めて知ることばかりでびっくり。隣で解説してくれた大学生が、住んでいる私たち以上に小田に詳しかったことにも驚きました。小田はコンビニもなく不便なところもあるけれど、人との距離が近くて思いやりを感じられるすてきなまちです。私も小田の魅力をどんどん見つけて、誰かに伝えられるようになりたいです。

大学生の解説に耳を傾ける中学生

地元のお母さんたちが作った郷土料理

小田市でにぎわう小田町中央商店

巨樹巨木のガイドをする谷本さん（右）

布の上に寝転ぶ子ども

久しぶりの再会を喜ぶ

みんなで布を見て語り合う

地域の人との対話を楽しむ井口先生

「一人一人の人生が輝いて、まちがある――」

先人たちの挑戦が今につながる

一枚一枚の布を見ると、語ってくれた一人一人の表情やその時の情景が目に浮かびます。

家族との温かい思い出や、生活で苦労した話、頑張ってきたことなど――。この布は地域の歴史文化の記録であり、住民の皆さんが何かに挑戦し懸命に生きた証でもあります。山も田畑も町並みも、今ある地域の全ては先人たちが手をかけてできたものです。一人一人の人生が輝き、みんなで手を取り合って、何かに挑戦したり、心から楽しんだりすることでまちがあるのだと思います。「つむぐ」にはそんな思いを込めました。

地域の価値は「人」

多くの地域が人口減少という大きな課題を抱えています。人の数で地域の価値が測られがちですが、決してそうではありません。地域の価値や幸せは、その地域に暮らす人が決めるものです。大切なのはここで暮らす人であり、どう生きるか。いかに地域を大切に思って、努力したり、挑戦したりしているか――。そこにこそ価値があると感じています。なくしたものに目を向けると、時には寂しさや悲しさを感じるかもしれません。でも、ここで生きる喜びや楽しさを感じながら、愛着を持って暮らす皆さんを見ると、数字では測れない豊かさがたくさんあるのだと気付かされます。

「つむぐ」は未来への種まき

作品を見た人からは「風に吹かれると、布が揺れて生き物のように思えた」という感想を多くもらいました。布の上を歩く人、子どもが寝転んでほほ笑む姿など触れ方も自由で、小田という地域像を心と体で感じ取ってもらえたように思います。過去を振り返ったり、未来を語ったりと、新たな語りも生まれ、地域の可能性を感じました。挑戦してよかったです。「つむぐ」は未来への種まき。この地域が世代を越えて、この先もずっと未来につむがれることを願います。

artist　**井口 梓**さん
（愛媛大学社会共創学部 副学部長）